マリア・モンテッソーリの自己選択

前之園　幸一郎

〔キーワード〕 マリア・モンテッソーリ, キアラヴァッレ, アントーニオ・ストッパーニ, グイド・バッチェッリ, サンテ・デ・サンクティス

は じ め に

M. モンテッソーリは，イタリアが独立した近代国家として歩きはじめる歴史的激動の時代にマルケ州の州都アンコーナ近郊の地方都市で生まれた。伝統的なものと新しい時代的息吹がせめぎ合う歴史的転換の激動の時期に，M. モンテッソーリは自己の生き方を必死に模索した。彼女は，社会から隔離された従来の伝統的女性としてではなく，本来的な人間としての自己の未来の展望を切り拓くために，時代的制約に対する積極的な挑戦を行った。特に，彼女は，当時の時代的状況のなかで女性に対して固く閉ざされていた高等教育への門戸を広く女性に開かれたものとするために多くの努力を行った。本稿では，M. モンテッソーリが自己の人格形成の過程において果敢に決断し実践した具体的な彼女の自己選択の歩みについて考察を行いたい。

I　マリア・モンテッソーリの幼児期とその時代背景

マリア・モンテッソーリは，イタリア・アンコーナ州の農業と産業の中心である地方都市キアラヴァッレで1870年 8 月31日に生まれた。彼女の誕生はイタリアの激動の時期と重なっており，まさにイタリアの国家統一の達成はその誕生の年にほぼ実現されつつあった。イタリア歩兵部隊＜ベルサリエーリ＞隊がローマに進軍するのは M. モンテッソーリ誕生の半月後の1870年の 9 月20日で

あり，国民投票の結果によりローマは同年10月２日にイタリアに併合された。

国家統一が達成されると，新生国家イタリアは困難で多様な問題に向き合うことになる。最初に直面した問題は新体制の国家とローマ教会との対立という政治的な課題であった。次に，国家が取り組まざるを得ない緊急課題として国家予算の建て直しの問題があらわになった。つまり，国家の赤字財政の健全化をはかり市民生活の発展のための基本的なインフラストラクチャーを整備するための経済問題が，新国家の前に立ちはだかることになったのである。さらに，労働者階級の立場からは，労働条件の改善とより良い生活のための厳しい要求が強まりつつあった。これは，イタリアにおいても工場における婦人労働が始まり，家族における女性の役割や伝統的な家庭生活の条件が大きく変化したことに関連していた。そして北イタリアの工業化の進展や南イタリアにおける古くからの貧困問題の存在から多くの社会問題が顕在化することになる。なかでも深刻なのは文盲問題であった。新国家は，これらのイタリア社会が歴史的にかかえる構造的な根本的問題に直面することになった。

さて，M. モンテッソーリの誕生の地キアラヴァッレにおいても大きな変化が進行しつつあった。それは経済的社会的に変貌を遂げつつあるイタリアの国家的な状況を特徴的に，また具体的に反映するものであった。もともとは農村地帯であったキアラヴァッレにおいてもいくつかの工場が存在するようになり，その中にはまさに工場的性格を強めつつあるタバコ工場が含まれていたからである。

このマルケ州キアラヴァッレの町に1865年に33歳になるアレッサンドロ・モンテッソーリ（Alessandro Montessori）が財務省から派遣されて着任した。彼は会計官であったが，娘マリアの誕生の頃にはキアラヴァッレタバコ工場の工場長の地位にあった。彼は，厳しい軍事的訓練による教育を受けており，イタリアの国家再興を目指すリソルジメント運動に参加した経験を有する自由主義者であった。彼の毅然とした性格には軍人的特徴が見られた。マッケローニによると，アレッサンドロは「上官たちが撤退するように命じる危険な状況の中で，最前線の歩哨として長時間にわたり職務を果た」す一途な人柄の人物で

あった。[1)]

M. モンテッソーリが小学校卒業後に数学を勉強したいとの希望を抱いたとき，またその後，さらに彼女が進路を変更して医学部に入学したいとの希望を述べたとき，この一徹で厳格な父親アレッサンドロはそれに強く反対した。その当時の人々の一般的常識によれば，女性に期待される第一の要件は善き妻，善き母親として教育されることであり，アレッサンドロは世間の一般的な常識にしたがって自分の娘が教師になるための教育を受けることを何よりも望んでいたからである。その伝統的な意識の父親にとって，娘の医学部進学の希望は問題外であった。この父親にとっては，男性だけしか受け入れていない医学部において「これまで注意深く養育されてきた若い娘に対して荒っぽく厳しすぎると思われる学問」を行う医学への道を認めることは，許しがたいものに思われたのである。[2)]

当然ながら，娘モンテッソーリと父親アレッサンドロとの間には冷たく意思疎通を欠いたぎこちない関係の時期が続いた。しかし，その気詰まりな雰囲気が打破される出来事が起きた。医学部における公開講演において，女子医学生の M. モンテッソーリが医学部学生に義務付けられていた講演発表で大成功をおさめたのである。これによってそれまでの父親と娘との冷たい関係は氷解することになった。そのいきさつは次の通りだ。

その講演発表には彼女に対する敵意に満ちた聴衆が出席していた。その多くは医学部における M. モンテッソーリの同級生たちであり，彼らは彼女の講演を妨害しようと待ち構えていたのである。しかし，そのことを思い出してモンテッソーリは「あの日は，ライオンの調教師にでもなったような思いでした」[3)]と述べている。実際，彼女の素晴らしい講演が終わると，大きな拍手が起こり，モンテッソーリの親友や仲間たちがお祝いを述べに父親の所に駆けつけたのである。「そこにいた父親は，群衆に取り囲まれ，眉をひそめて不安そうにしていた。彼は，自分に対してお祝いが述べられ敬意が払われるのを見て，これまでの娘への怒りが消えていくのを感じた（lasciò cadere il risentimento.）」[4)]。この出来事は，父親の保守的な考えに変化をもたらすことになった。父親アレッ

サンドロ・モンテッソーリは1900年の娘の誕生日に彼女に贈り物を与えた。それは，彼がこれまで内緒で収集した内外の新聞雑誌に掲載されている娘の活躍についての記事の束であった。この父親はそれらをひそかに集め保存していたのである。

証言によれば，M. モンテッソーリと母親レニルデ・ストッパーニ（Renilde Stoppani）の関係はさらに激しく複雑なものであった。先ず，母親レニルデは娘に対する第一の礼賛者であり支援者であった。この母親は，しばしば夜の長い時間を娘との話し合いや勉強で一緒に過ごした。その母親は，自分の一族の中に学者で宗教家で科学者でもある尊敬すべきアントーニオ・ストッパーニ（Antonio Stoppani, 1824-1891）を持っていた。しかも彼女は，当時としては女性として恵まれた教育を受けており読書に対する大きな情熱を持っていた。そしてその夫と同じように自由主義的で確固たる政治的信条を持ち，夫とリソルジメントについての理想を共有していた。彼女は，1866年に32歳でアレッサンドロ・モンテッソーリと結婚した。

さて，レニルデの叔父アントーニオ・ストッパーニについても見ておこう。彼は，パヴィアおよびミラノにおいて神学の教授であった。また，その二つの都市で自然史博物館（il Museo Civico di storia naturale）の館長も務め，1848年に司祭になった。彼は，その自由主義的思想から国家とローマ教会の対立を再調整する必要性を痛感していた。そこでこの両者の和解に反対する人々に向けて1866年に『非妥協主義者たち』“Gli Intransigenti” を出版した。彼は，また地質学に関する科学的な作品も書いている。1866年の『ドグマと実証主義的科学』“Il doguma e le scienze positive” においては，科学的進歩とカトリシズムの調和を追求している。M. モンテッソーリは少女時代にこの書物に出会った。後年，彼女はそこから学んだ科学的実証主義を社会的問題に適応する方法的視点を深めることになる。M. モンテッソーリは，『子どもの心』“La mente del bambino” pp. 56-57.）の中でアントーニオ・ストッパーニについて触れている。その引用の箇所で，A. ストッパーニが「大地の諸条件との関係におけるあらゆる生物の諸機能（le funzioni degli esseri viventi）を示しつつ，《すべての生物

は，自然の調和（l'armonia della natura）を保持するために闘うよう訓練された有能な軍隊である》」と述べていることを紹介している。彼女は，そこにすでにエコロジーの視点が打ちだされている点に注目している。息子のマリオ・モンテッソーリ Mario Montessori は，母親 M. モンテッソーリがアントーニオ・ストッパーニと親戚であることを喜びとして思い起こしていた，と述べている[5)]。

また，リタ・クレーマーは，母親レニルデが「過渡期の女性であった」と指摘している[6)]。レニルデは，その現実の生活においては結婚と家族にしたがう伝統的な生き方を大事にしながら，他方では娘マリアが彼女の夢の希望を実現するように励ましていたからである。しかし，その娘への姿勢は当然ながらその時代の女性の一般的な生き方と矛盾し，それを壊してしまうことを意味していた。自らは社会的文化的に制約された人生を送りながら，レニルデは娘マリアの科学者になろうとする選択に内心で声援を送り娘に近づこうとしていたのである。しかしそれにもかかわらず，レニルデは娘マリアの能力に信頼を寄せながらも，娘を甘やかすような態度はとらなかった。マッケローニによるあの有名なエピソードがそれを物語っている。モンテッソーリの一家が長期の休暇旅行から帰宅したとき，幼いマリアはお腹が空いたと母親に繰り返し訴えた。母親はしばらく待つようにとさとした。マリアはすぐにと言って聞かなかった。そのモンテッソーリの強情な態度に対して，母親は固くなったひと月前のパンの一切れをとり，「待てないなら，これを食べなさい」と彼女に与えた。母親レニルデは決然たる厳しい性格の女性であった。しかし娘マリアに対しては理解ある助言者でもあり，M. モンテッソーリの人間形成に重要な役割を果たした。

M. モンテッソーリは，以上のような両親の深い愛情と厳しいしつけによって教育された。彼女の最初の著作『教育学的人類学』“Antropologia pedagogica”は，その両親に感謝とともに捧げられている。厳格ながら愛情に富む家庭的雰囲気の中で，M. モンテッソーリは子どもの頃から障害で苦しむ人への注目といたわりの感受性を示しながら成長した。モンテッソーリの生い立ちについて書かれたものの中で，特に有名なエピソードをマッケローニは伝えている。M.

モンテッソーリは少女の頃から弱い立場の人への優しい気遣いを示した。14歳のとき，重度の脊柱彎曲症の女の友だちと一緒に歩いていた。マリアはその友人の気分を紛らしてあげようと散歩に連れ出していたのである。しかし，この二人の少女の外見上の違いについて小声でささやき合う心無い人々の好奇心によって，その善意の行為は裏切られてしまった。そのとき，母親レニルデは，娘にその少女が不愉快な思いをしないですむような援助の仕方を考えるようにと助言を与えた。[7)]

以上のことから明らかなように，M. モンテッソーリが受けた教育は，その特徴において19世紀中期のイタリアの中流階級の家族がその子女に行ったものと一致している。娘の教育は母親にゆだねられていた。そして母親レニルデは，その役割を積極的に確実に果たしたのである。

II　19世紀イタリアの女子教育と M. モンテッソーリ

M. モンテッソーリの家族は，彼女が 5 歳になった1875年に父親の転勤のためにローマに移り住むことになった。その翌年，M. モンテッソーリはローマ市街中心部のヴィア・ディ・サン・ニコロ・ダ・トレンティーノ（Via di San Nicolò da Tolentino）の小学校 1 年に入学した。小学校の教育科目の中で彼女は数学に大きな興味を示し始め，小学校を終えると技術学校（scuola tecnica）への進学の進路を選んだ。この彼女の選択は，当時，教育制度がまだ厳密なものとして確立されていなかったために女子の受け入れが認められた結果によるものであった。M. モンテッソーリは，その後，技術高等学校（istituto tecnico）に進学した。そして，その学校の物理・数学課程の卒業資格（la licenza nella sezione fisico-matematica）が，幸運にも M. モンテッソーリの大学への進学を可能にした。

当時の学校制度を見ておこう。1800年代後半のイタリアにおいては，小学校を終えた女子児童が進学できる普通の進路は師範学校（scuola normale）であった。その学校は教職につくための最低限度の教養を与えるものであった。

そのほかに女子が進学できる進路には，中等学校とは実際には見なされていない職業準備学校（professionale）が存在した。師範学校は，労働者階層ないしは小市民階層出身の女子を受け入れ，女子に自立と社会的に認められている仕事への従事を可能にする教育機関であった。しかしこの学校は袋小路となっており，そこから大学への進学の道は閉ざされていた。

ところで，技術学校 scuola tecnica に進学したいとの M. モンテッソーリの希望は父親の強烈な反対に会うことになった。しかし，母親の同意を取り付けることによって，ようやく M. モンテッソーリの願いは実現されることになった。その結果，1883年に13歳の M. モンテッソーリは，王立ミケランジェロ・ブオナロッティ技術学校（Regia Scuola Tecnica Michelangelo Buonarroti）に入学した。同校における三年制の課程を修了すると，M. モンテッソーリは1886年から1890年まで王立レオナルド・ダ・ヴィンチ技術高等学校（Regio Istituto Tecnico Leonardo da Vinci）において学んだ。彼女がこの技術高等学校で選択した履修科目の成績の結果が今日ローマ大学の歴史資料館（Archivio Storico dell'Università degli Studi di Roma "Sapienza"）に残されている。その「M. モンテッソーリ個人資料（fascicolo personale di Maria Montessori posizione RS 170）」の中の「通知表（libretto scolastico）」によると，彼女は物理，数学，化学，イタリア語，地理学に特に優れていた。しかし，他方ではドイツ語，製図，特に建築の装飾学（ornato）の成績はかんばしくなかった。

1890年に技術高等学校の物理・数学コース（sezione fisico-matematica）の卒業資格を取得した M. モンテッソーリは，大学の数学専門の学科に進学する希望を抱いていた。しかし，彼女はその志望を突然に変更し医学部に進む決心をする。マッケローニは，この医学部への志望変更が，M. モンテッソーリが一人の貧しい女に出会ったことに関連していると述べている。M. モンテッソーリは，ある夕方，ローマ市内のある通りで，赤ん坊を腕に抱いて歩道に座って物乞いしている女を目撃した。その子どもは，母親に抱かれながら手に持った一枚の赤い小さな紙切れ（una strisciolina）で一心不乱に遊んでいた。「その細かな様子をモンテッソーリはよく覚えていた。道端のその親子の風景について

話しながら，医学を勉強しようとの決心がどのように生じたかをモンテッソーリは語ったものである。この出来事について述べるとき，モンテッソーリの両眼は深い輝きに満ちていた。それはあたかも言葉の先にある事柄を探しだし掘り出そうとしているかのようであった。どうしてなの？と彼女自身が問うていた」[8]。悲惨さと貧困のこの様子がM. モンテッソーリに衝撃を与え，それが彼女の医学部への志望変更に結びついたのである。彼女がその少女時代に恵まれない人々に対して援助を行おうと試みたように，今回はその感受性が医学研究に向けて発揮されることになったのだ。彼女は，自分の人生が他人に役立つものでありたいという願望を抱いていた。彼女には，発展しつつある衛生学，生物学，医学，心理学などが人間の生活条件の改善と幸福に寄与するものであると思われたのである。

さて，ここでイタリアにおける当時の女子の大学への進学問題について見てみよう。1877-1900年の期間に，技術高等学校の卒業資格で大学への進学が認められた女子学生は11名であった。同期間にイタリアにおける女子の大学卒業者は224名であった[9]。ところで，M. モンテッソーリの医学部進学の決心は，またもや家庭内での激しい対立を生み出した。当時のイタリアにおいては，女性が職業として医者を選んで活躍することには大きな困難がともなったからである。ラーヴァによれば，1902年当時においては「女医の数はごく少数であり，女性の医師の仕事に対する一般の家庭からの往診要請の声はほとんど見られなかった。女性の医師は，婦人科医や小児科医としても活躍する働き場所が存在しなかった」[10]。

M. モンテッソーリの父親の娘の大学進学への反対は，ある意味では当然であった。当時の一般的風潮として，女子高等教育に対する社会の意識は明確な反対ではないにしても，冷ややかで批判的であったからである。そのような社会一般の意識ならびに態度は，1800年代の後半においてはむしろごく一般的なものであり，実際に大学に在籍する女子学生の数も少数に過ぎなかった。

具体的に見てみよう。1877-1900年の期間に女性に与えられた大学卒業の学士号（lauree）の数は257であった。一方，すでに見たように女子の大学卒業生

(laureate) は224名である。そのうちの31人は二つの学士号を取得しており，1名の学生，マリア・ビッフィニャルディ（Maria Biffignardi）は三つの，正確には法律 (1896)，文学 (1899)，哲学 (1900) の学士号を取得している。イタリアで最初に大学を卒業した女性はエルネスティーナ・パペール（Ernestina Paper）である。彼女は1877年に医学と外科学の学士号をフィレンツェ高等研究学院（Istituto di Studi Superiori di Firenze）で授与され，1878年に病院を開設して女性や子どもたちの診療を行った[11)]。その女医としての診療開始は，M. モンテッソーリが 8 歳のときである。

われわれは，その偉大な業績と人間性に対する敬愛と尊敬の念から M. モンテッソーリに対して無意識のうちに神格化の誤りを犯す傾向がある。上述の歴史的事実から明らかなように M. モンテッソーリは，イタリアにおいて医学部を卒業した最初の女性ではなかった。彼女は1890年に大学に入学しているからである。さらに彼女は，イタリアで最初の女医でもない。しかしこれらの事実はいささかも彼女の偉大さを損なうものではない。なお，イタリアの大学制度においては博士号の称号は存在しなかった。今日も存在していない。イタリアでは大学卒業者は，通常，男性に対してはドットーレ (dottore)，女性にたいしてはドットレッサ（dottoressa）と尊称で呼ばれる。したがって，プロフェッソーレ（professore 教授）やプロフェッソレッサ（professoressa 女性の教授）の呼称が，社会的にはドットーレ（学士）よりもはるかに評価が高い。また，ドットーレないしドットレッサには医者の意味もある。おそらく，ドットレッサ・マリア・モンテッソーリ（Dottoressa Maria Montessori）の日本語への翻訳は，「博士」ではなく「女医マリア・モンテッソーリ」が正確だと考えられる。

さて，女性の社会的活躍や学問的分野への進出に対しては，伝統的で道徳的なもろもろの制約がブレーキとして機能した。女子教育の内容ならびに方法についての議論は，イタリアの国家統一後，さらに激しい論争を生み出した。その議論は女性が社会で担うべき役割や働きにまで及んだ。ピエモンテ政府によって国家統一以前に制定された総合的教育法であるカザーティ法 (1859) は，高等教育からも，古典的高等学校（ginnasio-liceo）からも，技術高等学校

（istituto tecnico）からも女性を締め出してはいなかった。しかしそのことはこの教育法の立法者の側の視野の広さや社会における女性の差別的な地位への深い理解に由来するものではなかった。その逆に，この法律は，むしろ女性差別的な思想の上に成立していた。それが，当時の慣習にもとづいて男子の学校に自分の娘を入学させるような親は存在しないであろうとの前提に立って制定されたものだったからである。

しかし，国家統一後，トリノにおけるダネオ（Daneo）姉妹や，ローマにおけるバッリオ（Ballio）姉妹の例に見られる女子の大学入学のケースから，女子の高等教育をめぐって論争が展開されることになった。その結果，大学一般規則（Regolamento generale universitario）に関して，1875年10月 3 日勅令 R.D. 第2728号第8条の規定により，女性も学生ならびに聴講生として大学入学者名簿に登録され得ると定められたのである。それは，当時の政治的・文化的論争を通じて促進されつつあった政治的，社会的，経済的変革や，変貌しつつあるイタリア社会の希望や抵抗を反映するものであった。つまり，その背景には，相互に矛盾する二つの動きがあった。すなわち，新しい方向を目指す動きと，他方では，伝統的なすでに確立されている体制を新たに立て直し強化しようとする動きである。かくて，女性解放や，批判的･建設的な精神を持って社会で活躍する女性を育成する教育的理想の実現は，強固で保守的・伝統的な勢力の人々によって絶えず阻まれることになったのである。

伝統的な保守派の人々の見解によれば，女子教育は「家庭を守る天使のような女性」（donna angelo del focolare）の育成を目指すべきだとされ，女性に基本的に必要なものは，知育や高度の学問ではなくしつけの教育であった。特に，女子高等教育に対する反対は，社会的，道徳的性質の懸念に結びついていた。穏健派の人々からさえも，女子学生が大学の講義室で男子学生の中に混じって授業を受けることによって，男子からの冷やかしや無視の立場に晒されることが懸念された。このような女子教育を巡る議論や道徳的な懸念によって成立したのが女子師範高等学校（Istituti Superiori Femminili di Magistero）である。この学校はデ・サンクティス文部大臣の通達によって1878年ローマとフィレン

ツェに二校が創設された。バッチェッリ文部大臣はその通達を1882年に正式の法律に改め，これを教育制度のなかに本格的に位置づけた。

この女子師範高等学校は女子のため 4 年制の高等教育機関であり，師範学校卒業資格（licenza normale）取得者のために門戸が開かれていた。その入学のための基本的要件からは高等教育への必須の科目であるギリシャ語・ラテン語が除かれていた。カリキュラムについても総合的な体系を欠き，この学校は明らかに大学よりも水準が一段階低いまさに「女子のための大学」（università delle donne）の性格を特長としていた[12]。かくて妥協的な女子のための学校が誕生することになったのである。それは，明らかな限界を持ちながらも，女子にも中等教育への機会を与え社会生活への準備を行うことを目指すものであった。1883年についに女子に対しても古典高校卒業資格（licenza liceale）が授与されることになった[13]。大学教育を受けたいと望む女子にとって困難ではあるが，大学への道が開かれたのである。具体的には，1883年に女子も古典高等学校（i ginnasi-licei）ならびに技術高等学校（gli istituti tecnici）に進学する権利が認められた。大学進学のためにはこれらの学校の卒業資格が基本要件とされたのである。

Ⅲ　大学における M. モンテッソーリ

このような歴史的・文化的な環境の下で M. モンテッソーリは大学に進学した。しかし，彼女が最初に直面した困難は医学部への直接の進学ができないという問題であった。彼女が卒業した技術高等学校（Istituto tecnico）の物理・数学（fisico-matematico）課程の卒業資格は，たしかに大学進学の資格は与えるものであった。しかし，そのコースから進学できる学部は限定されていて，物理・数学・自然学部（facoltà di scienze fisiche, matematiche, e naturali）にしか進学できなかった。M. モンテッソーリはローマ大学の付属病院長のグイド・バッチェッリ（Guido Baccelli, 1832-1916）に面会し医学部進学について直訴する機会を得ることができた。バッチェッリは医師でありマラリア感染

の研究で知られている人物であるが，1874年からは代議士として活躍し数回にわたり文部大臣も務めた政治家でもあった。彼はM. モンテッソーリの医学部進学の懇願に対して，それはできないと厳格に申し渡した。このバッチェッリの否定的見解は，大学の学問研究の世界における女子学生受け入れ反対の雰囲気を十分に踏まえてのことだったと思われる。しかし，実際にはローマ大学では女子の入学が1875年から認められてはいた。そして，事実，1890年にローマ大学医学部に2名の女子学生が入学していたのである。そこで，M. モンテッソーリは自分の希望を簡単にはあきらめなかった。彼女は，バッチェッリとの面談を終えたとき，彼に対して「先生，それでも私は医学を勉強します」（Eccelenza, studierò medicina.）とあいさつをして退出した。[14)]

M. モンテッソーリは1890年にローマ大学自然科学学部（corso di laurea in scienze naturali della facoltà di scienze matematiche, fisiche e naturali dell' Universita di Roma）に入学した。そして最初の2年間の履修の後，1892年に修了証書（il diploma di licenza）を取得した。最初の1年間の課程で，植物学，動物学，実験物理を，第2年目の課程で組織学（istologia），一般生理学，比較解剖学，一般化学および有機化学を履修した。

ところで，自然科学学部の最初の2年の課程と医学部の最初の2年の課程は，同一のカリキュラムで構成されていた。そこで前期2年の修了証書（la licenza della facoltà medica）を取得した医学部の学生は自然科学学部への学部編入が認められていた。[15)]他方，自然科学学部のディプロマを取得した者は，さらにイタリア語とラテン語の単位を履修することによって医学部に学士入学することが許された。これは，文部大臣ボセッリ（Boselli）によって署名され，1890年10月26日勅令第7337号によって承認された大学一般規則による。その規定によると，自然科学学部前期課程からは医学部への転学部のためにはイタリア文学とラテン語の履修が必修とされると定められていた。

M. モンテッソーリは，1893年に念願がかなってローマ大学医学部の3年生に編入が認められた。彼女の願書は，1893年1月21日に医学部によって受理が決定され，1893年2月9日に文部省で正式に承認された。[16)]しかし，医学部への

入学を果たしたにもかかわらず，彼女の前には，さらなる困難が立ちはだかった。それは，男子学生による反発と敵意であった。バッチェッリ教授は，男子学生たちからのあまりの態度に業を煮やして，自身の解剖の時間に「その授業に出席している唯一の女子学生に向けられた嘲笑や冷やかしで興奮している学生たちにメスを投げつけた」[17)]。

大学の授業において，彼女は男性の女性に対する偏見から免れることはできなかった。若い女性が男子学生と一緒に死体を解剖するのは穏当ではないとの当時の考え方にしたがって，M. モンテッソーリは解剖室において一人で時間を過ごさなければならなかった。これは彼女の将来に向けての最初の試練であった。1896年に親友のクラーラに宛てた手紙の中で，M. モンテッソーリは解剖室での不安な気持ちを次のように述べている。骸骨の標本が目のまえにあり，アルコールづけの内臓の標本や解剖された人体に取り巻かれると不安な気持ちにとらえられた。それまで遺体を見たこともなかったのに，いまやもっとも残酷な形でそれと向き合わなければならない。そして，彼女は解剖の授業を放棄しようとまで考えた[18)]。

この手紙は，M. モンテッソーリが自分の行った医学部進学の選択が正しかったかどうかと迷っている様子を伝えている。自分の決心がぐらつき，「何もすることができないのではないか（non saper far nulla）」，「無意味なことを行っているのではないか」と彼女の内面で疑問が生じ，深く悩んでいる。しかし彼女は，最終的には辛さに耐えながら思い直して解剖学の授業の履修を続けた。

大学での日々は重要な年月であった。なぜなら，モンテッソーリは当時のもっとも著名な医学者たちと知り合うことができたからである。彼女は，教授たちのなかに，一般生理学のオランダ出身の学者モレスコット（Moleschott）教授，精神医学のボンフィリ（Bonfigli）教授，実験衛生学のチェッリ（Celli）教授，大学診療所長のバッチェッリ（Baccelli）教授などと出会うことができた。この事実についての情報は，ローマ大学の「歴史資料館」に残されている「M. モンテッソーリ個人資料 RS 212」によって確認できる。特に，上記の最後

の 3 人の教授は彼女にとって重要な人々である。大学卒業後に，M. モンテッソーリは彼らと一緒に研究に従事するようになるからである。

M. モンテッソーリは，1896年の 7 月10日に卒業論文『拮抗的諸幻覚に関する研究による臨床的貢献』“Contributo clinico allo studio delle allucinazioni a contenuto antagonistico” を提出して大学を卒業する。指導教官は，ローマ大学精神科診療所長のエーツィオ・シアマンナ（Ezio Sciamanna，1850–1905）教授である。彼は，パリの神経病学者シャルコー（Charcot）や，ウイーンのベネディクト（Benedikt）の弟子であり，1892年からローマ大学で神経病学（neurologia）を教えていた。また1895年からはローマ大学で精神科診療所を精神病院から切り離して独立した部局として開設し，その責任者として運営に当たっていた。

M. モンテッソーリが拮抗的諸幻覚（Allucinazioni antagonistiche）を卒業論文のテーマとしてとりあげたのには理由があった。それは，当時この問題に大きな関心が寄せられていたにもかかわらず，それがドイツの研究者たちによって取り上げられることのない論題であったことによる。この卒業論文はすでに言及したローマ大学歴史資料館の「M. モンテッソーリ資料」（fascicolo Maria Montessori posizione RS 212.）に収められている。

さて，M. モンテッソーリがその卒業論文においてしばしば引用を行ったイタリア人研究者の一人は，拮抗的諸幻覚に関心を寄せている精神医学者サンテ・デ・サンクティス（Sante De Sanctis, 1862–1935）である。彼は，1866年に医学部を卒業し，セルジ（Sergi）教授のもとで人類学研究を深め，生理学的心理学における基本的な問題を追及した。デ・サンクティスは，実験にもとづく心理学研究を進めるにあたり，最初の課題として障害児における精神異常の程度を明らかにするためのテストの考案の必要性に着目した。そして彼は，そのテストの結果にもとづいて細かい配慮で子どもを扱うことの重要さを訴えた。彼は，1899年にローマに最初の養護学校（asilo–scuola）を開設した。それは，軽度の障害児のための教育施設である。デ・サンクティスは，また多くの彼の著作の中で『夢－ある精神病医の臨床的心理学的研究』“I sogni: studi clinici e

pscicologici in un alienista”）なる表題の著作を著している。その刊行は，フロイトの『夢判断』に僅かに先んじていた。

ところで，デ・サンクティスは，拮抗的諸幻覚について，「心理学における対立的諸現象」（“I fenomeni di contrasto in pscicologia”, 1895），および「消極的狂気と拮抗的諸幻覚」（“Negativismo vesanico e allucinazioni antagonistiche”, maggio 1896）の二つの研究論文を発表している。彼は，ローマ大学精神科診療所においてこれを研究対象にしていたのである。デ・サンクティスの上記の二番目の論文は，M. モンテッソーリの卒業論文提出に 2 ヶ月先んじて発表されている。さらに，1897年には，デ・サンクティスと M. モンテッソーリの二人の連名の論文「いわゆる拮抗的諸幻覚について」（“Sulle cosidette allucinazioni antagonistiche”, 1897）が発表されている。[19)] このことは，デ・サンクティスが M. モンテッソーリの論文指導を行いながら，彼女の草稿の観点を上記の自分の論文に取り入れているとも考えられる。M. モンテッソーリは，その卒業論文の中に彼女の直接の指導教官であるシアマンナ教授からの引用はまったく行っていない。

さて，話を M. モンテッソーリの卒業論文にもどそう。その論文は，先ず序論において「幻覚一般」と「拮抗的幻覚」が論じられている。彼女は，幻覚一般に関しては近代精神医学の創始者の一人とされるエスキロル（Esquirol, Jean Etienne Dominique, 1772–1840）を引用している。拮抗的幻覚については，ピネル（Pinel, Phlippe, 1745–1826）が引用されている。ピネルは，精神異常者に対して監獄における囚人を扱うように乱暴な扱いをすること改めさせた。すなわち，罪人と同様に扱われていた狂人を開放して，医学的治療にゆだねさせたのである。エスキロルは，ピネルの弟子であり，精神病学の改革のために大きな貢献を行った。この二人は患者の精神的内面の世界を知るための方法として観察を重視した。さらに彼らは，入院患者に対して道徳的な扱いを治療の中心においた。M. モンテッソーリが卒業論文作成において中心的に依拠したイタール（Itard, 1775–1838）もピネルと一緒に仕事をした経験を持っていた。

序論に続いて，M. モンテッソーリは，ローマ大学医学部精神科診療所におけ

る，またボンフィリ教授の好意によって実現したローマ市内の精神病院における臨床的観察の諸事例について具体的に詳述し，その事例に対する彼女自身の解説を展開している。ちなみにボンフィリ（Clodomiro Bonfigli, 1838–1919）教授は，最初はフェッラーラで，次いでローマで精神病院の院長を務め，障害児の援助に専念していた。さらに，ローマ大学の精神科診療所の教授でありながら国会議員でもあった。

さて，M. モンテッソーリは機会のある限り自身で患者の詳細な観察を行った。彼女は，その観察にもとづく臨床的事例を踏まえて，卒業論文の結論部分で拮抗的諸幻覚についての分類を行うことを提案している。それまで，その提案に見られる患者の病状の実態にそくした分類はまったく行われておらず，また分類・整理の発想も存在しなかった。

M. モンテッソーリのこの卒業論文は，すでに述べたように，大学への提出の翌年にデ・サンクティス教授と連名の論文「いわゆる諸幻覚について」として発表された。それは，彼女の卒業論文における論文構成の骨格をそのまま残してはいたが，しかし，そこには同時代の多くの研究成果が参照され詳述されている。特に，卒業論文との比較で言えば，精神病患者のあらゆる症状には，その患者自身の個人的性格が大きく関係していることが強調されている。当時，著名であった精神病学者モルセッリもこれと同様の観点に立っていた。モルセッリ（Enrico Morselli, 1852–1929）についても説明しておこう。彼は，トリノ大学の精神医学（pscichiatria）の教授であったが1889年からジェノヴァ大学の教授となり神経症の研究に当たりながら，精神科病院の改革に専念した。彼は実験心理学や人類学にも大きな関心を抱いていた。M. モンテッソーリは彼を尊敬していた。

さて，上記の論文は，M. モンテッソーリの卒業論文が二人の執筆者によって書き改められたものとも言える。M. モンテッソーリの卒業論文にデ・サンクティス教授の経験が付け加えられて，二人によって原型にあたる卒業論文がより体裁を整えられた研究論文として発表されたのである。このデ・サンクティス教授との連名論文の発表以前に，M. モンテッソーリは単独で論文「気管支喘

息におけるライデン水晶の意味について」を発表している。[20)]

大学卒業は，M. モンテッソーリにとって確かに彼女自身によって描かれた計画の一つの輝かしい実現であった。そのために彼女は多くの文化的社会的な障害と格闘しなければならなかったのであった。ところが，この大学卒業は，M. モンテッソーリにとって同時にさらにまた新たな第一歩をも意味した。彼女は，当時の医学の世界に受け入れてもらい，新しい仕事に従事しながら経験と研究を深めていかなければならなかったのである。医学部卒業から1909年までの年月の間は，M. モンテッソーリにとっては息の抜けない，しかも充実した活動の時期であった。彼女は，この期間に多くの人々に接する機会を持ち，また学問に真剣に打ち込み，多方面の興味を抱き，それを追求したからである。この時期に M. モンテッソーリは専門の分野においても個人的なプライバシーの面においても重要な選択を行った。彼女が，特に社会的な問題として注目したのは，女性の諸権利の擁護ならびに障害児の救助の課題であった。彼女は，この二つの社会的集団のために熱烈なる活動を展開した。それは，いずれもそれぞれに理由は異なるにしても，彼らが社会的に周縁部に押し込められている人々であったからである。

M. モンテッソーリが蓄積しつつあった豊富な経験は，間接的ではあっても「子どもの家」の実験に向けての熱心な準備の時期を意味していた。M. モンテッソーリの最も有名な著書『科学的な教育の方法』(“Il Metodo della Pedagogia Scientifica”)[21)]。初版本の最初の部分で，この著書は「『子どもの家』における 2 年間にわたる経験」によって生まれたものだと書かれている。しかし，その数行後では「この著作が 2 年間の経験によって生まれたというのは正確ではない」と訂正している。そして「この 2 年間の経験が，これから私がこの書物で述べるすべてのことを執筆する創造性を私に与えてくれた訳ではない。『子どもの家』の教育的組織はそれ以前の経験なしには生まれなかった。もし正常児についての現在の経験の経過が短か過ぎるにしても，その経験は障害児についてそれ以前になされた多くの教育学的経験に由来するものであり，また十分な思想の検討を経たものである」と述べている。[22)]

障害児について行われた科学的研究は，その後のM. モンテッソーリの仕事の発展のための重要な経験になっている。また，それは特に『科学的教育の方法』の草稿作成の基礎ともなった。これらのことを考えあわせると，M. モンテッソーリが大学を卒業した1906年からのほぼ10年間に彼女によって展開された全活動のすべてが1909年の著作に反映されていると言うことができるだろう。M. モンテッソーリは，1909年の『科学的教育の方法』の公刊によって彼女の進むべき進路をさらに明確に自覚するのである。

注

1) A.M. Maccheroni, *Come conobbi Maria Montessori*, Roma, Edizioni “Vita dell’ Infanzia”, 1956, p. 118.
2) A. Leonarduzzi, *Maria Montessori. Il pensiero e l’Opera*, Brescia, Paideia Editrice, 1967, p. 11.
3) 『モンテッソーリの発見』E.M. スタンディング，佐藤幸江訳，エンデルレ書店，1997, 10頁.
4) *op. cit*., A.M. Maccheroni, p. 29.
5) Paola Trabalzini, *Maria Montessori da Il Metodo a La scoperta del bambino*, Arancne, 2003, p. 17.
6) 『マリア・モンテッソーリ　子どもへの愛と生涯』リタ・クレーマー著，三谷嘉明他訳，新曜社，1981, 25頁.
7) *op. cit*. A.M. Maccheroni, p. 26.
8) ibidem, p. 27.
9) V. Ravà, *Le donne laureate in Italia*, in《*Bollettino Ufficiale del Ministero dell’ Istruzione Pubblica*》, a. XXIX, vol. 1, n. 14, 3 aprile 1902, p. 639.
10) *ibidem*, V. Ravà, op. cit. p. 640.
11) M. Raicich, Liceo, *Università, professioni: un percorso difficile*, in S. Soldani［a cura di］, *L’educazione delle donne: scuole e modelli di vita femminile nell’Italia dell’800*, Milano, Angeli, 1985, p. 156）
12) S. Ulivieri, *La donna e gli studi universitari nell’Italia posto-unitaria*, in F. De Vivo, G. Genovesi［a cura di］, *Cento anni di università. L’istruzione superiore in Italia dall’Unità ai nostril giorni*, Napoli, ESI, 1986, pp. 219-228.
13) *op. cit*., Paola Trabalzini, p. 23.
14) *op. cit*., A.M. Maccheroni, p. 28.

15) A. Forti, Messina, *Il sapere e la clinica. La formazione professionale del medico nell'Italia unita*, Milano, Franco Angeli, 1998.

16) *op. cit*., Paola Trabalzini, p. 24.

17) M.S. Castellazzo, *L'inserimento della donna nella vita socio-culturale italiana*, in《*I problemi pedagogica*》, a. XXII, n. 4, luglio-agosto, 1976, p. 620.

18) *op. cit*., Paola Trabalzini, p. 24.

19) S. De Sanctis, M. Montessori, *Sulle cosidette allucinazioni antagonistiche*, in《*Policlinico*》, a. IV, fasc. 2, febbraio 1897, pp. 68-71 e fasc. 3 marzo 1897, pp. 113-124.

20) M. Montessori, *Sul significato dei cristalli del Leyden nell'asma bronchiale*, estratto dal《*Bollettino della Società Lancisano degli Ospedali di Roma*》, a. XVI, fasc. I. Roma, Tipografia Innocenzo Artero, 1896.

21) M. Montessori, *Il Metodo della Pedagogia Scientifica applicator all'educazione infantile nelle Case dei Bambini*, Città di Castello, Tip. Casa editrice S.Lapi. 1909. イタリア語版は，その後，改定増補されて1913年（2版），1926年（3版），1935年（4版）に改訂版が出版され，1950年には第5版が『子どもの発見』(“*La scoperta del bambino*”）とタイトルを改めて刊行された．

22) M.Montessori, *Il Metodo della Pedagogia Scientifica applicato all'educazione infantile nelle Case dei Bambini. Edizione critica*, a cura di P. Trabalzini, Edizioni Opera Nazionale Montessori, 2000, pp. 111-112.

“Veramente io non sono esatta dicendo che il presente lavoro proviene da due anni di esperienza: non credo che questi miei ultimi tentativi, avrebbero potuto permettere di creare tutto quanto esporrò in seguito. Il sistema educativo delle Case dei Bambini, infatti, non nasce senza più lontane origini: e se il corso della presente esperienza è così breve sui bambini normali, essa però proviene da precedenti esperienze pedagogiche fatte sui bambini anortmali, e come tale rappresenta un assai lungo lavoro del pensiero.”